

令和5年度

へき地・小規模校教育研究発表会

第26回研究発表会資料

ふるさとに夢や誇りをもって、
未来の創り手となる子供の育成

日時

令和5年8月1日(火)
午後1時30分から午後4時30分まで(受付開始 午後1時)

会場

国立オリンピック記念青少年総合センター
(カルチャー棟 小ホール)

目 次

奥多摩町立古里小学校 研究発表資料	1
三宅村立三宅中学校 研究発表資料	9
へき地・小規模校の教育について	17
青梅市教育委員会	17
檜原村教育委員会	18
奥多摩町教育委員会	19
東京都教育庁大島出張所	20
東京都教育庁三宅出張所	21
東京都教育庁八丈出張所	22
小笠原村教育委員会	23

自分の考えをもち、表現できる児童の育成

—基礎的・基本的な学力の定着を目指して—

奥多摩町立古里小学校

I 地域及び学校の概要

1 地域の概要

奥多摩町は、東京都の北西端に位置し、全域が秩父多摩甲斐国立公園に含まれ、東京の奥庭として親しまれている。面積は 225.53 平方kmと全都の約 1 割を占め、その 94%が森林である。町内には、東京都の最高峰である標高 2,017mの雲取山を始め、三頭山、御前山、川乗山など、登山客に人気の高い山が多くある。

町の西から東へ多摩川が貫流しており、カヌーやラフティングなどを楽しむ観光客が多く訪れる。動植物の種類も豊富で、動物では町の鳥であるヤマドリの他、サルやシカ、イノシシ、タヌキ、テン、カモシカ等、植物も町の花であるミツバツツジの他、ニリンソウ、カタクリ、ユキノシタ等、数多く見られる。ワサビや奥多摩やまめが特産品である。

これらの豊かな自然を生かして、総合的な学習の時間を中心に、ワサビの植え付けや収穫、シイタケ栽培、ヤマメの飼育など、奥多摩の自然や人材を活用した数々の体験学習を行っている。子供たちは、地域の人と関わりながら、伸び伸びと学習している。

2 学校の概要

本校は、明治 6 年に公立惟神学舎として小丹波地区西光寺に開設。明治 34 年 4 月には、3 つの地区に教場（分校）が配置された。その後大正 2 年 9 月に川井分校が廃止、昭和 30 年 4 月に奥多摩町立古里小学校と改名し、昭和 33 年 12 月棚沢分校廃止、昭和 61 年 3 月、最後の分校である大丹波分校の廃止を経て、昭和 61 年 4 月より全児童が入学時から同一校舎で学ぶ体制となり現在に至る。令和 5 年度は創立 150 周年を迎え、今秋には記念誌を発行し、記念集会や記念式典の実施を予定している。

(1) 教育目標

奥多摩町立古里小学校に学ぶ一人一人が、郷土奥多摩の誇りを胸に、持続可能な社会の創り手となり、世界に羽ばたく人材（グローバル人材）となることを目指し、以下の教育目標を定める。

いのちを大切にして 共に輝き 生きていこう

- ・かしこく …学ぶ楽しさを知り、生活に生かすことができる児童
- ・なかよく …人と心を通わせ、互いの良さを生かすことができる児童
- ・たくましく…心身ともに丈夫で、よりよく生きていくことができる児童

(2) 令和 5 年度の児童数

学級数 : 8 学級（知的障害特別支援学級、自閉症・情緒障害特別支援学級含む）

児童数 : 82 名

3 特色ある教育活動

(1) 異年齢集団での活動の充実

豊かな人間関係と社会性を育み、発達の段階に応じてよりよい学校生活を築こうとする態度を身に付けさせるために、各種集会活動、運動会、全校遠足及びロング遊び等での異年齢集団、縦割り班活動を実施している。

(2) 保育園・小学校・中学校との連携

互いを認めることができる豊かな人間関係の育成を図るために、同じ町内の奥多摩町立氷川小学校との交流学习や校外学習、第4・5・6学年において、移動教室を合同で実施している。また、スタートカリキュラムを基にした同地域にある古里保育園との計画的な交流の実施や、奥多摩町立奥多摩中学校の出前授業・体験授業の実施を通して連携を強化促進し、円滑な接続（つなぎ・つなぐ）を図っている。

(3) 学習意欲を高める指導

自学自習できる児童を育成するとともに、家庭学習の定着を図るため、学校と家庭の両面でタブレット端末の活用を一層進めている。

(4) インクルーシブ教育の充実

「インクルーシブ教育」の理念を踏まえ、合理的な配慮、学校生活全般にわたるユニバーサルデザイン化を一層推進している。通常の学級と校内の特別支援学級との交流及び共同学習を計画的に行い、特別支援教育の充実を図っている。また、特別支援教室と連携し、通常の学級に在籍する児童の支援体制を充実させている。

(5) 地域人材の活用及び体験学習の充実

生活科や総合的な学習の時間等において、コミュニティ・スクールを生かした地域人材の積極的な活用を進めている。地域の自然や文化を生かした教育活動（奥多摩学習）を推進し、ESD・SDGsとの関連を図りながら各種体験学習を充実させ、児童の興味・関心を高めるとともに、郷土を愛する心の育成を図っている。



6年生対象の生け花教室

(6) 表現力を高める活動の工夫

音楽朝会や音読朝会を設け、児童の表現力の育成に取り組んでいる。また、親子読書旬間、地域の作文・詩集である多摩の子への取組、俳句、校長室暗唱検定等の言語活動の充実を一層図り、自信をもって表現できる児童の育成を推進している。

(7) 読書活動の推進

学校図書館を活用した学習活動の充実、読書活動の推進を図っている。各学期の親子読書旬間の設定、各種読み聞かせ等、計画的な読書活動を設定し、児童が日常的に本に触れることができる環境づくりを行っている。また町の図書館や保護者との連携を深め、読書の楽しさを味わわせ、言語能力の向上及び読書が好きな児童の育成を目指している。

II 研究主題の設定理由と研究のねらい

1 研究主題の設定理由

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（平成20年1月17日）にて、知的活動（論理や思考）の基盤として言語に関する能力を高めていく重要性が示された。また、小学校学習指導要領（平成29年告示）において、学習の基盤となる資質・能力として言語能力の向上が重要な課題とされている。

古里小学校に通う児童の多くは、幼少期から共に過ごしており、互いの思いや考えを細かに言葉で表さなくても分かり合えるという実態がある。その一方で、自分の思いや考えをうまく言葉で表現できないことにより、学習や生活に対する苦手意識が生まれてしまう現状も見られている。そのため、言語能力の向上は、古里小学校の児童にとって重要な課題である。

また、これからの予測が困難な時代における持続可能な社会の担い手として、他者と協働して課題を解決していく力も養っていく必要がある。これらのことから、「自分の考えをもち、表現できる力」の育成が重要であると考え、学校での授業を通して、互いを認め合いながら、考えや思いを表現する力を身に付けさせることをねらいとして、研究を進めることとした。

さらに、基礎的・基本的な学力の定着を目指すことで、表現する力の素地を十分に養っていきけるよう副題を「基礎的・基本的な学力の定着を目指して」とした。そこから児童自らが主体的に学びを深めたり、より創造的に表現したりする力を育成していきたいと考えた。

2 研究の概要

(1) 研究の内容と経過

ア 検証授業の実施

年3回（7月13日、10月5日、11月9日）の検証授業を実施した。

イ 校内OJTを活用した授業提案と授業実践の参観

分科会でペアを組み、日常的に授業提案と授業実践の参観を行っている。その際、指導の成果と課題を明らかにしながら、授業改善を図っている。

(2) 研究主題に迫るための手だて

研究主題「自分の考えをもち、表現できる児童の育成」には、基礎的・基本的な学力の定着を目指すとともに、「ア 児童が自分の考えをもつための手だて」及び「イ 児童が適切に表現するための手だて」が必要であると考えた。検証授業の際には、分科会ごとに提案を行い、研究主題に迫ることとした。



4年生対象の箏教室

ア 児童が自分の考えをもつための手だて

- ・考えたくなる、表現したくなる活動の設定
- ・問題提示の工夫
- ・発問の焦点化
- ・思考ツールの活用
- ・考えを比較したり、整理したりする時間の設定
- ・多様な情報収集方法の提示

イ 児童が適切に表現するための手だて

- ・話し合う目的の明確化
- ・話型の提示
- ・図や表を用いた多様な表現方法の提示
- ・ペア、グループの意図的な編成
- ・話し合う活動を振り返る時間の設定

Ⅲ 研究の構想図

令和4年度
研究構想図

教育目標

いのちを大切に 共に輝き 生きていこう
かしこく なかよく たくましく

校内研究における教育目標の具現化

かしこく 正しい知識・技能を身に付ける
なかよく 協働して考えを深め合い高め合う
たくましく なぜだろう、どうすればよいだろうと自ら考え、ねばり強く取り組む

児童の実態

- ・学ぶことを素直に楽しむことができる。
- ・小規模校のため互いの考えや思いを細かに表さなくても分かり合え、これは長所でもあり課題でもある。
- ・基礎的・基本的な学力の定着に課題が見られる。

教師の願い

- ・基礎的・基本的な学力を定着させたい。
- ・物事をじっくり考える習慣を身に付けさせたい。
- ・互いの考えを対話的に伝え合い、深め、広げられる力を身に付けさせたい。

令和2・3年奥多摩町教育委員会研究指定校
研究成果の積み上げを基に

研究主題

自分の考えをもち、表現できる児童の育成
—基礎的・基本的な学力の定着を目指して—

表現するための
素地を養う取組

主体性を育てる
取組

創造的な表現へ
つなげる取組

研究の内容・手だて

児童が自分の考えをもつための手だて

- ・考えたくなる、表現したくなる活動の設定
- ・問題提示の工夫
- ・発問の焦点化
- ・思考ツールの活用
- ・考えを比較したり整理したりする時間の設定
- ・多様な情報収集方法の提示

児童が適切に表現するための手だて

- ・話し合う目的の明確化
- ・話型の提示
- ・図や表を用いた多様な表現方法の提示
- ・ペアやグループの意図的な編成
- ・話し合う活動を振り返る時間の設定

◎地域の人材・資源とのつながり
◎OJTペアによる授業実践・参観の日常化

IV 研究の実際

1 授業実践

(1) 実践事例1 ～小学校第2学年 体育科～

ア 単元名 跳び箱を使った運動遊び 「がんばれ にんじゃくん」

イ 単元の目標

- ・跳び乗りや跳び下り、手を着いてまたぎ乗りやまたぎ下りをする方法等を知り、友達と一緒に遊ぶことができるようにする。
- ・跳び箱を用いた簡単な遊び方を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えることができるようにする。
- ・跳び箱を使った運動遊びにすすんで取り組み、順番やきまりを守り、誰とでも仲良く運動したり、跳び箱の安全に気を付けたりすることができるようにする。

ウ 研究主題に迫るための手だて

＜児童が自分の考えをもつための手だて＞

- ・考えたくなる、表現したくなる活動の設定

にんじゃくんになるという活動を設定し、「忍者」という世界観をもたせることにより、子供たちの学習意欲の向上を図った。

＜児童が適切に表現するための手だて＞

- ・話し合う目的の明確化

忍者にアドバイスをするという設定をすることにより、「する」以外にも「見る」や「支える」などの視点を入れた。苦手な児童でも様々な運動の楽しさにふれるため、児童が主体的に課題を解決することができると思った。また、自分の考えを「すすんで伝え合う」必然性が生まれるのではないかと考えた。

- ・話型の提示

自分の考えをより伝えやすくするため、オノマトペを効果的に使用させる。自分が運動をしたり、見たりして得たコツを、オノマトペで表現して友達に伝える活動を設定することで、より主体的に運動に取り組むことができるようにした。

エ 成果

・児童が、「にんじゃくんにアドバイスをする」という明確な見通しをもち、学習できたことで、アドバイスをするために必要なこと（運動のコツ）を探そうとする姿が見られた。

・オノマトペを効果的に使用させることにより、低学年の児童同士でも、運動のコツを伝え合うことができた。

オ 課題

・試技に夢中になり、話し合う場面が疎かになる部分があった。

・話し合う場面をより明確することで、伝える必然性をもたせる必要があった。



全体で運動のコツを探る

(2) 実践事例2 ～小学校第3学年 算数科～

ア 単元名 「大きい数のかけ算のしかたを考えよう」

イ 単元の目標

2位数×3位数に1位数をかける乗法の計算の仕方を理解し、確実に計算することや成り立つ性質について理解できるようにする。

ウ 研究主題に迫るための手だて

〈児童が自分の考えをもつための手だて〉

- ・毎時間の反復練習

授業の導入時に計算練習や九九の暗唱などを行い、基礎的・基本的な学力の定着を図る。

- ・問題提示の工夫

学習支援アプリの共有機能を活用してタブレット端末上で教師によるヒントを提示し、問題の把握が確実にできるようにする。

〈児童が適切に表現するための手だて〉

- ・図や表を用いた多様な表現方法の提示

図や表の活用場面を説明し、自分の考えの表現の幅を広げることにつなげる。

- ・考えを比較したり、整理したりする時間の設定

児童同士の考えを比較するために、学習支援アプリの共有機能を活用する。タブレット端末上で、じっくりと他者の考えに目を通せるようにすることで、自分の考えを深めたり、広げたりできるようにする。また、他者と考えを共有することで自信をもって発表することにもつなげる。



タブレット端末の効果的な活用

エ 成果

- ・タブレット端末を用いることで、他者の考えと自分の考えを比較しながら、考えさせることができた。これにより交流しながら、児童が自分の考えを深めることができた。

- ・ノートに考えを書く際に、矢印や図を効果的に使う児童が増えた。

オ 課題

- ・タブレット端末の操作に手間取ってしまう児童もいたため、タブレットを使う場面を精選する必要がある。

- ・九九の習熟や問題を把握する段階でつまづく児童も見られた。基礎的・基本的な学力の定着を目指し、導入時の反復練習等を継続していく必要がある。

(3) 実践事例3 ～小学校第5学年 音楽科～

ア 単元名 日本の音楽に親しもう

イ 単元の目標

- ・住み続けられる町づくりをするために、自分たちが音楽でできることを考えて、お囃子の楽器の演奏に取り組む。
- ・自分たちの思いと音色や旋律の特徴を関わらせて、反復、呼びかけと応え、変化等を工夫し、まとまりのあるお囃子の音楽をつくる。

ウ 研究主題に迫るための手だて

＜児童が自分の考えをもつための手だて＞

- ・考えたくなる、表現したくなる活動の設定

地域の伝統芸能で使われる楽器である篠笛に取り組みさせる。自分たちのつくった音楽を、学校外の人に聴いてもらう機会を設定することにより、音楽表現で思いを伝える力を高める。

＜児童が適切に表現するための手だて＞

- ・話し合う目的の明確化

地域の方からお囃子について教えていただき、自分たちのつくった音楽への助言をもらうことにより、自分たちの住む町の文化を大切にしていける気持ちや、和楽器の演奏に対する自信をもたせ、自分たちが地域で共に伝統音楽を継承していくことの価値を感じ取らせることができるようにする。そのために、どのような思いを音色や旋律に込めるのかを話し合わせ、グループで編曲する。



地域の方による篠笛の指導

エ 成果

・旋律や楽曲のイメージを言葉だけでなく、思考ツール（タブレット上に音色の強弱を書き込む等）で伝え合い、音楽的な特徴について共有・共感することで考えを深め、対話的な学びを表現に繋げていた。

・「森」や「祭り」など曲のイメージごとのグループを編成することによって、自分だけでなく友達とも案を出し話し合い、意見を交流し、なぜそのように編曲するのか根拠を求めて音色を工夫しようと活動していた。

オ 課題

・授業の振り返りでSDGsの観点について振り返るのか、音楽的な内容について振り返るのか明確化させた方が良かった。

・ESD（持続可能な開発のための教育）の関連を意識することで授業改善も図るようになりたい。

V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 「児童が自分の考えをもつための手だて」として、教科等の特性に応じた「考えたくなる、表現したくなる活動」を設定したことで、児童がすすんで学習に取り組む姿が見られるようになった。また、場面に応じてタブレット端末を活用し、考えを比較したり整理したりする時間を設定したことにより、児童が他者の考えの良さに気づき、自分の考えを深めることにつながった。
- (2) 「児童が適切に表現するための手だて」として、話し合う目的を明確にしたことにより、児童は、自らの考えや思いをすすんで表現することができるようになってきた。
- (3) 校内OJTを活用した授業提案とその実践を参観し合うことにより、児童が自らすすんで考えたくなる、表現したくなる活動について工夫改善しながら、学年の発達段階に応じた系統的な手だてを構築することができた。
- (4) 学習に関するアンケートより (%)

肯定的回答の割合 (当てはまる・どちらかといえば当てはまる)	第4学年 1学期 3学期	第5学年 1学期 3学期	第6学年 1学期 3学期
①自分の考えをもち、先生や友達に伝えようとしている。	56.3 79.9	58.3 90.8	52.6 99.9
②他の人の考えも参考にして、考えを深めるようにした。	62.6 93.3	83.3 90.8	63.2 99.9
③どうしてそうなるのかという理由を考えながら学習した。	75.1 93.3	66.6 81.7	89.4 94.4
④答えだけではなく、考え方も確かめながら学習した。	56.3 86.6	75.0 72.6	73.7 88.8
⑤授業では、他の人と考えを交流しながら課題を解決する活動を行っていると思う。	37.6 86.6	75.0 90.8	84.2 99.9
⑥授業では、自分が理解したことを他の人や先生に説明する時間があると思う。	50.0 93.2	83.3 81.7	68.4 83.3

全体を通して各学年とも各項目における肯定的回答の割合が大きく増加している。特に項目①⑤⑥からは、児童の学び方への意識の変容（インプット型からアウトプット型へ）が見て取れ、研究の大きな成果の一つと考えられる。

2 今後の課題

- (1) 話し合いを通して、児童自身の考えに深まりや広がりが見られているかという視点をもち続け、引き続き検証していく必要がある。
- (2) 教科の特性や発達段階に応じたICTの効果的な活用場面について更に研究を進めていく必要がある。
- (3) アンケート項目④及び⑥の一部学年において、肯定的回答の割合が減少している。このことから、答えだけではなく、考え方も確かめながら学習する習慣付けや意識付け及び自分が理解したことを他者へ説明する時間を設ける等、今後も授業改善を図る際に取り入れていく。

学習者用端末とアダプティブ教材を活用したへき地教育の実践

—個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実による学力向上—

三宅村立三宅中学校

I 地域及び学校の概要

1 地域の概要

三宅島は、伊豆諸島で大島、八丈島に次いで第3に大きな島で、東京都の山手線に囲まれた位の大きさである。島の中央部には雄山があり、度重なる噴火によって独特な地勢が形成されている。雄山は気象庁によって活火山に指定されており、平成12年の噴火後、4年5か月の避難生活を余儀なくされた。全島避難解除後は人口が減少しており、現在の人口は約2,200人ほどである。(令和5年4月現在)

また、島全体が富士箱根伊豆国立公園に指定されており、大路池でのバードウォッチングも有名である。島の主な産業としては漁業であり、黒潮の影響を受ける好漁場を背景に、キンメダイ、マグロ、カツオ等が水揚げされる。

2 学校の概要

平成12年の噴火による全島避難の影響もあり、平成19年に三宅中学校・阿古中学校・坪田中学校の3校が合併し、現在の三宅中学校が開校した。島内には保育園、小学校、中学校、高等学校が1校ずつ設置されており、三宅村では「保小中高一貫教育」を推進している。異校種間の連携や円滑な接続を図るため、学力向上・キャリア教育・健全育成の三部会で構成される定例委員会を設置し、年度ごとに成果をまとめ、発表会を実施している。加えて、運動会、音楽会、作品展、マラソン大会等を合同で実施している。また、生徒・教職員と地域との交流が盛んであり、課外活動で生徒と教職員が交流する場面も多い。

本校では、地域の特色を生かした郷土理解学習として、野鳥観察会、シーカヤック体験、巨樹学習などの活動を行っている。体験活動は地域資源や地域人材によって支えられており、地域からの学校教育に寄せる期待の高さがうかがえる。子供たちの成長を村全体で見守る風土と体制が培われている。

このような環境下で、生徒の自己決定の場面が不足する状況も見受けられる。そこで、本校では生徒に考える時間を十分に与え、適切な支援をしながらも自己決定を促す活動を重視して取り組んでいる。これは、

本校の学校教育目標である「ふるさとの発展に進んで貢献する生徒の育成」を達成するための基軸である。生徒の自己実現に向け、主体的・実践的な態度を育み協働の中で生徒の自尊感情を高めていきたい。

三宅村立三宅中学校 学校教育目標

「ふるさとの発展に進んで貢献する生徒の育成」

- 一 目標をもって意欲的に学ぶ生徒
- 二 人間性・社会性をはぐくみ
相手の立場に立って行動する生徒
- 三 心身ともに健康で明るい生徒

II 研究主題の設定理由と研究のねらい

1 研究主題の設定理由

本校の生徒は、授業に意欲的に取り組む生徒が多い。授業者の指示をよく聞き、分からないことを質問しながら、素直に取り組むこともできる。また、少人数である強みを生かし、各教科等で発表活動を多く設定しており、意欲的に取り組んでいる。一方、学力調査は、全国平均を下回る結果が続いており、授業内の取組を効果的に学力向上につなげることが課題となっている。

生徒の実態として、課題が2点挙げられる。第1に、家庭学習の充実である。東京都の「令和4年度児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果によると、平日の家庭学習が30分以下であると答えた生徒の割合が約37.5%（都平均比約+11.9%）いることが分かった。また、自分で計画を立てて学習しているに対して肯定的に回答をしている生徒の割合が約54.5%（都平均比約-12.4%）という現状がある。生徒の家庭学習を支え、支援するための取組が必要である。

第2に、学習者用端末の活用方法の拡大である。令和2年度から学習者用端末が生徒一人に1台配備され、本校に在籍する生徒の多くは隣接する三宅小学校において、学習者用端末を活用したプログラミング教育に取り組んできた。そのことを生かし、授業内での調べ学習や発表のためのスライド作成や発表活動への活用を進めている。しかし、学習者用端末の利点である生徒同士の協働的な学びを促す取組や、ポートフォリオとしての活用については、ためらいがある。これは、機器の活用に不安があり、機能を利用し指導できる教職員が限定的であることに起因している。

そこで、本研究では、二つの視点から教育活動の充実を図る。

第1に、AI機能を搭載したアダプティブ教材を活用した「個別最適な学び」の実現である。AI機能を搭載したアダプティブ教材により、本校生徒の学習環境について一層充実させ、学習管理表の活用によって生徒の家庭学習を可視化する。可視化されたデータを基に生徒・保護者・教職員が連携して、家庭学習の充実に取り組む体制を構築し、学力向上を目指す。

第2に、学習者用端末の活用による「協働的な学び」の実現である。学習者用端末の活用を拡大し、各教科等の授業でのデジタル化を推進することにより、学習過程での協働的な学びや学習評価を充実させる。また、総合的な学習の時間にテーマを設定し、より能動的で探究的な活動となるよう、指導改善を図る。

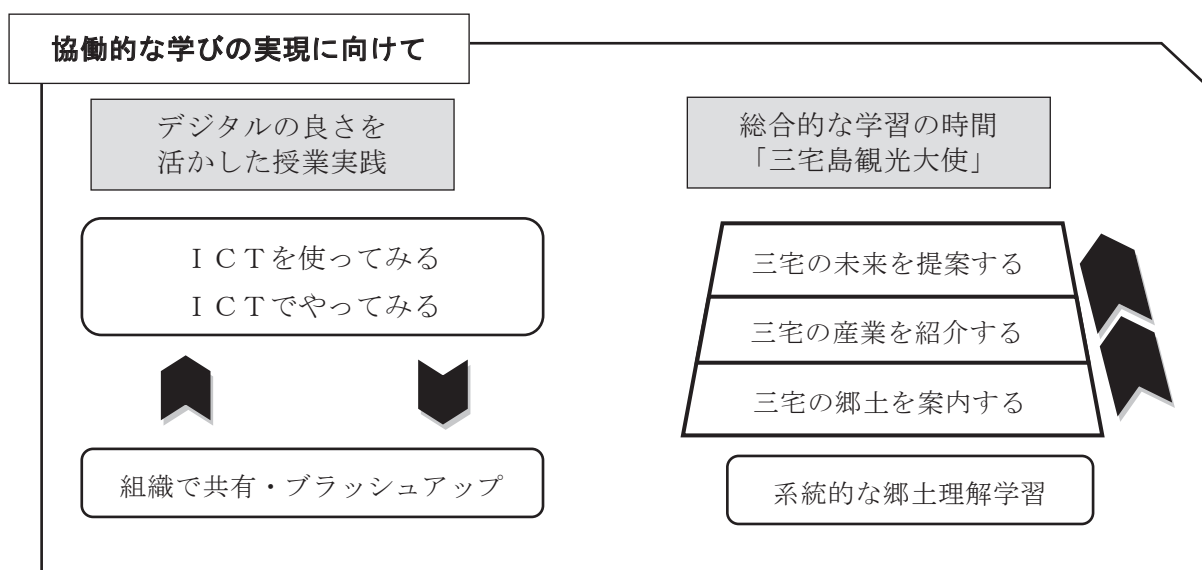
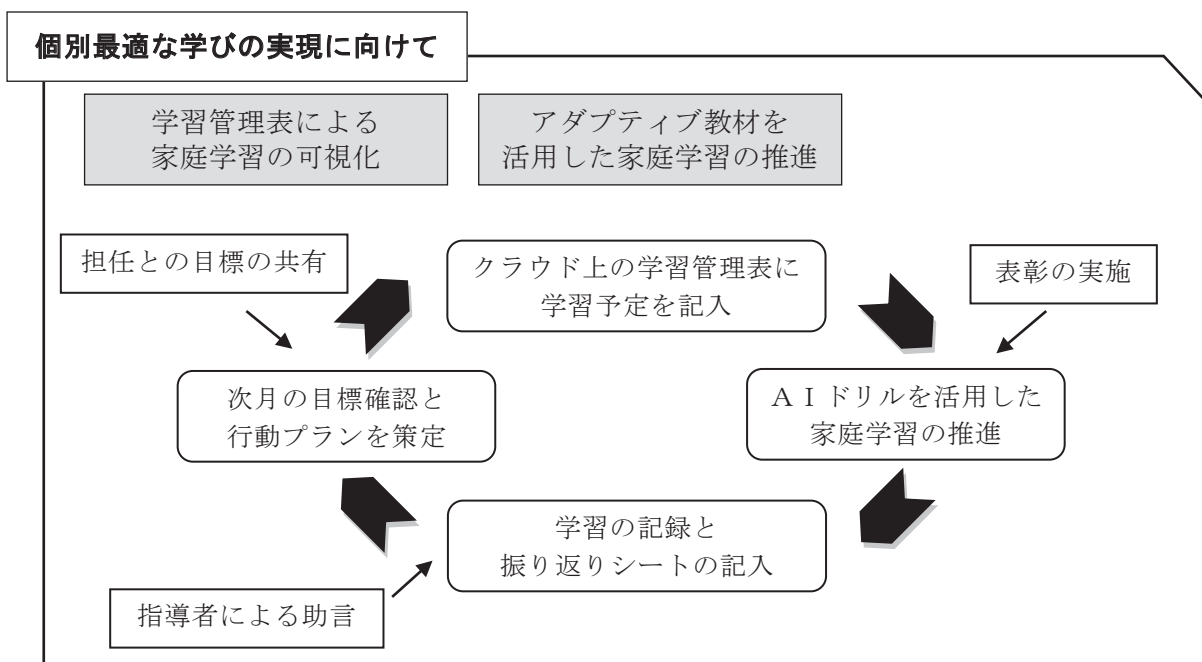
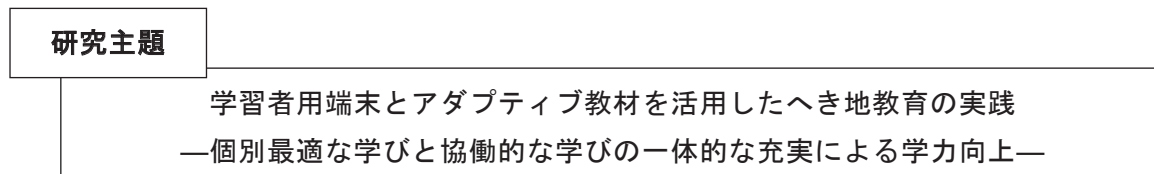
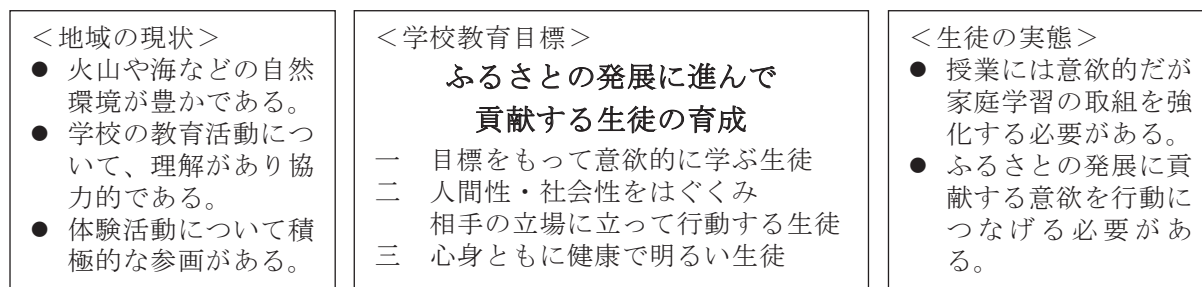
2 研究のねらい

生徒数が少なく限られた環境の中で生徒の可能性を最大限発揮するため、次の3点を主なねらいとし、どのような取組が有効であるか、明らかにする。

- (1) アダプティブ教材を活用した家庭学習の推進による学習習慣の定着
- (2) 各教科等のデジタル化の推進による生徒の学びに向かう力の向上
- (3) 郷土理解学習の推進を通して郷土の発展に向けて行動する生徒の育成

Ⅲ 研究の内容

1 研究の構想図



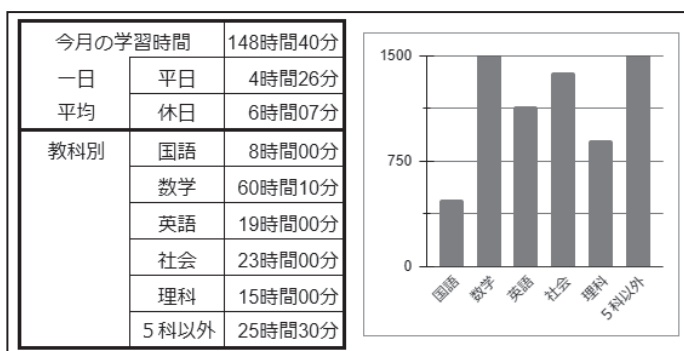
2 学習管理表による家庭学習の可視化

家庭学習の充実には、生徒の実態を詳細に把握し、励ましていく必要がある。そこで、オンライン上の表計算ソフトを活用し、家庭学習の計画を立て記録を蓄積するための教材「学習管理表」を開発した。本教材は、以下の機能を搭載し家庭学習の可視化を目指した。

- (1) 家庭学習を行う日時、教科、内容を生徒自ら考え、計画を記入する。
 - ・定期考査前には、朝学習の時間を活用して学習表を記入し、生徒全員が学習計画を立てられるようにした。
- (2) 実施後に実際の学習時間と活動の振り返りを記録する。
 - ・学習習慣の確立にはPDC Aサイクルの充実が求められるため、計画していた学習が行えなかった場合でも、ありのままに記録させることから始めた。
 - ・生徒の振り返りに対して、指導者がコメント機能を活用し、励ましの言葉やアドバイスを送ることで、生徒の自己肯定感を高めるようにした。
- (3) 月ごとに学習内容を振り返り、次月の目標を立てる。
 - ・学習時間の累計はグラフで表示される。教科間のバランスや平日・休日のバランスを見ながら、学習習慣がどの程度身に付いているかを確認することができるようにした。

日	曜	予定			実施			教科	内容	振り返り
		開始	終了	時間	開始	終了	時間			
5	水	21:00	22:00	60分	20:00	22:00	120分	英語	その他	英検の勉強に集中できた。
6	木	16:00	17:00	60分	16:00	17:00	60分	数学	ワーク	学校で集中してできた。
6	木	17:00	18:00	60分	20:00	22:00	120分	英語	ワーク	終わった。◎
6	木	20:00	21:00	60分						
6	木	21:00	22:00	60分						
7	金	16:00	17:00	60分	16:00	17:00	60分	数学	ワーク	集中できなかった。
7	金	17:00	18:00	60分	20:00	21:30	90分	英語	その他	英検頑張った
7	金	20:00	21:00	60分	14:00	15:00	60分	社会	復習	単元テストの復習ができた。
7	金	21:00	22:00	60分						
8	土	16:00	17:00	60分	20:00	23:00	180分	英語	その他	英検頑張った

加えて、この取組を全校体制で実施するため、オンライン上の学級経営ツールを活用した。家庭学習に関するクラスであることを明示するため、「うちで学ぼう」と命名し、運用した。全教職員が全生徒分のファイルを閲覧・編集することを可能にすることにより、生徒の学びを全校体制で可視化し、指導の充実を図ることができるようにした。



今月の反省

テストに向けて数学をしっかり学習できたかなと思います。やっぱり、苦手意識は持ってしまうし、それはしょうがないことだけど、それでも頑張って決めた時間内はしっかりやらなくてははいけないなと思いました。今月は英検もあって色々ごちゃごちゃした部分はありましたが、色分けをしたり、途中途中で小さな目標やゴールを決めたりして自分なりに工夫できたのは良い点だったのかなと思います。テスト明けも実力テストがあったので勉強しなくなったという現象に陥らなかつたので、その部分も良かったかなと思います。来月は新しい内容を中間テストに向けてしっかり定着させることと、3年間の復習に取り組んできたいです。

3 アダプティブ教材を活用した家庭学習の推進

本校では、令和3年度からAI機能を搭載したアダプティブ教材を導入している。この教材は、学年に関係なく生徒の学力に応じた学習をする「無学年式」を採用している。そのため、生徒の理解度に応じて自動的に振り返り学習を提案したり、生徒の興味に応じて高校範囲の先取り学習をしたりすることができる。

この教材の導入当初は、生徒が自ら学習を進めることを期待していたが、利用頻度が少なく、生徒自ら学習を進めることにつながっていないことが分かった。そこで、授業での活動と連動させたアダプティブ教材の活用を図った。

- 各単元終了後、授業者が復習問題を配信し、家庭学習や次時の導入として取り組ませる。(理科、社会科)
- 長期休業の直前に復習確認テストを実施し、弱点と診断された問題を配信し、長期休業中の課題として取り組ませる。(国語科、数学科)
- 家庭で事前課題に取り組みせ、その内容を理解した前提で授業を実施し問題演習の時間を長く確保する。(英語科、国語科)

また、この取組を前述の学習管理表と連携し、家庭学習を更に推進するために実施したのが「校内グランプリ」である。これは、設定された期間内に学習時間や学習日数が多い生徒を表彰するものである。多くの生徒が受賞対象者となるよう、学習時間に加えて教科ごとの賞を設定することにした。

第1回校内グランプリは、令和4年6月に実施した。各教科で期末考査の学習や、期末考査後の復習問題の提示により、生徒への活用を進めた。約半数の生徒が参加し、自己肯定感を高めることができた。

多くの生徒が参加するようになったのは第2回校内グランプリである。これは、夏季休業期間を活用して実施され、各教科の授業担当が復習課題を設定することにより自主的に参加する生徒が増えた。加えて、学ぶ意欲をもった生徒が、学校の授業がない期間を活用し、小学校段階の既習事項を振り返って学習するようになった。

そのため、第1回校内グランプリでは表彰を受けることができなかった生徒も受賞する機会を得ることができ、家庭学習の促進は更に進んだ。

校内グランプリ 表彰一覧

最多登板賞	学習日数が多かった生徒
最多勝	完了単元数が多かった生徒
最長登板	学習時間が長かった生徒
紫式部賞	国語の学習時間が長かった生徒
フィボナッチ賞	数学の学習時間が長かった生徒
ジョン万次郎賞	英語の学習時間が長かった生徒
ノーベル賞	理科の学習時間が長かった生徒
マンデラ賞	社会の学習時間が長かった生徒

4 デジタルの良さを生かした授業実践

これまで、学習者用端末の活用は授業者が教具的に活用する例が多く、学習者の文具的な活用は不十分であった。そこで、学習者の文具的活用と学習記録の蓄積を目指し、オンライン上の学級運営ツールを活用することにした。

モデル授業として、国語科で「学習者用端末上で活動・蓄積する授業」を実施した。

はじめに、本文をオンライン上の文章作成ツールで提示し、本文の分析を行った。次に、分析から考えたことをオンライン上のワークシートにまとめた。いずれの活動も一つのファイルを共同編集することにより、効果的に協働学習ができるようにした。加えて、活動の振り返りを学級運営ツールのポートフォリオで蓄積し、学習者の振り返りや授業者の評価に活用した。

その後、モデル授業を伝達するための研修を実施し、「学習者用端末上で活動・蓄積する授業」の紹介に加え、オンライン上の各種ツールの基本的な使い方・操作の説明、学級運営ツールを活用して課題の回収、提出物の評価方法、採点したクラス平均を基に授業改善をしていくための手法などを全教職員で共有した。この提案を基に、各教科等での活用が推進されていった。一部を紹介する。

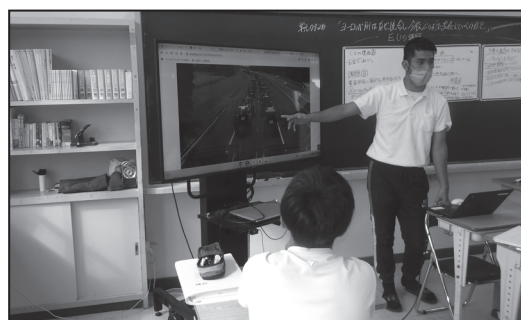
<英語科>

- ・プレゼンテーションツールによるレポート作成とそれを用いた英語でのスピーチ
- ・デジタルホワイトボードでのスピーキングテストの相互評価
- ・アンケートツールを活用した単語テスト、小テストの実施
- ・音声教材の提示
(教科書本文、英語の歌など)



<社会科>

- ・学習内容をプレゼンテーションツールに共同編集でまとめ、発表
(インターネット上の最新の統計データ等も活用できる)
- ・発表内容をカメラで撮影し、評価に活用
- ・デジタルホワイトボードを活用した情報共有や意見交換



<美術科>

- ・描写ツールを活用した絵画制作、模写
- ・カメラ機能を使いストップモーション（コマ撮り）の動画を制作
- ・表計算ソフトを活用したドット絵の作成
- ・デジタルタイマーを活用した時間管理



日隠れ、未だ雨降り。天龍寺の北門より、いで、坂道を登る。歩めると突如雨、降りきたり。雨降り、竹林は宇治の抹茶のごとく深緑に輝き、水溜に映える。竹の葉にそそぐ雨粒もいと美し。この景色、島の自然想いおどろかさる。この一時の時雨に夏の始まりを感ず。

嵯峨の竹雨に洗われ青光り

- 連絡事項はオンライン上の学習管理ツールにて行い、授業を欠席した生徒や授業内容を復習したい生徒が活用することができた。
- 授業または単元ごとにポートフォリオを作成し、学習の振り返りに活用した。

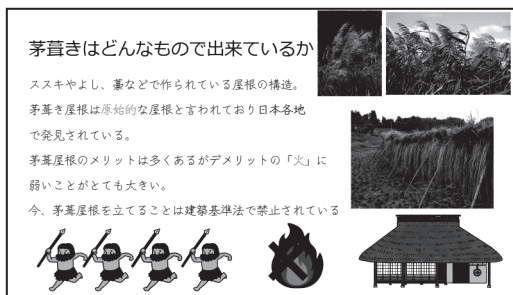
5 総合的な学習の時間「三宅島観光大使」

本校では、隣接する三宅小学校と連携して郷土理解学習を推進している。小学校段階では、三宅島の特色である自然（火山、海洋、植生、鳥）や歴史・文化（島内には多くの神社があり、富賀神社大祭など島全体の祭事もある）に関する知識を「調査」することに重点を置く。中学校段階では、調査した結果を島外の他地域と「比較」して郷土の良さや郷土のためにできることを考えることに重点を置いたカリキュラムを設定している。

学年	学習内容
小学校第3学年	学校周辺の自然
小学校第4学年	三宅島の人々の生活
小学校第5学年	三宅島の伝統文化
小学校第6学年	三宅島の歴史
中学校第1学年	三宅島ガイドブックの作成
中学校第2学年	他地域との交流（比較・検討）

三宅島に関する郷土理解学習の系統図
(令和3年度三宅村教育研究員発表)

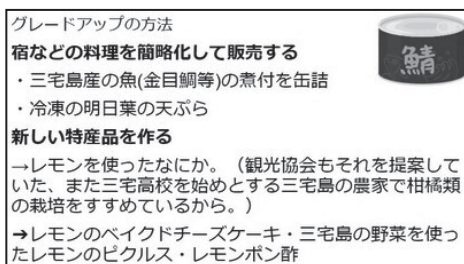
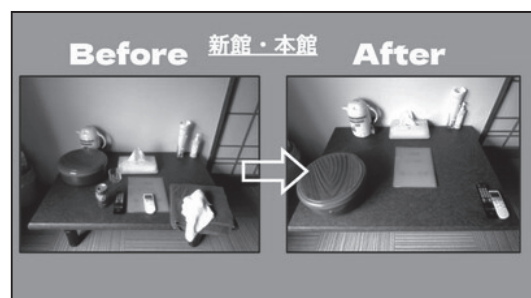
このカリキュラムに加え、令和4年度より中心的なキーワードとして「三宅島観光大使」を掲げた。これは上述のカリキュラムに改良を加え、より能動的で探究的な要素を加えたものである。本校では毎年10月に学習成果を発表する機会として「文化祭」を行っている。全校生徒が「三宅島観光大使」の一員として発表を行った。



第1学年は、テーマを「三宅の郷土を案内する」に設定し、三宅島の野鳥、火山、巨樹、海、茅葺についての探究学習を実施した。学習者用端末を活用した調べ学習に加え、野鳥観察会、雄山入山体験、巨樹の写生会、茅葺体験などの体験学習を積極的に取り入れた。生徒が「体感した」三宅島の良さについてまとめ、発表を行うことで、小学

校での学習を発展させることができた。また、学習した内容をホームページにまとめ、三宅島の郷土の魅力を全世界に発信することができた。

第2学年は、テーマを「三宅の産業を紹介する」に設定し、三宅島の産業について学習を行った。その後、5日間の職場体験活動を実施した。地域の産業について体感したことについて、前年度までの郷土理解学習で培った知識を踏まえて考えることにより、生徒がキャリア教育をより身近に捉え、深く考えることができるようになった。



第3学年は、テーマを「三宅の未来を提案する」に設定し、三宅島の人口増加・維持を視点に3グループに分かれて政策提案を行った。島民への聞き取りやアンケート調査の内容を元に発表を行い、その後、ゲストティーチャーによる質疑応答を加えたシンポジウムを実施した。生徒が考えたキーワード「島民が育てる

三宅島」には、参加者から多くの反響があり、生徒のみならず保護者や島民全体に対して、郷土理解学習の重要性と可能性を示すことができた。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) 年4回実施される定期考査での学習管理表の活用をはじめ、月ごとに学習管理表の提出を求めることにより、学習習慣の確立を図ることができた。記録が習慣化した生徒の中で、学習時間のグラフから家庭学習の量を客観視し、増やそうと取り組む生徒が増えた。その中で、「問題を繰り返し解くことの大切さに気が付いた」と振り返る生徒もおり、家庭学習の促進に一定の効果があつたことが伺える。また、資格試験の勉強に活用する生徒もおり、教科学習以外でも、様々な面で学習管理表が応用できることが分かった。

(2) 月1時間以上アダプティブ教材を活用した生徒の割合が「学期中」、「長期休業中」とともに増加した。各教科で宿題として配信されている内容に加え、小テストや定期テストに向けて反復学習に取り組む生徒も多く見られた。家庭学習に取り組むことが「あたりまえ」になるための第一歩を踏み出すことができた。

月1時間以上アダプティブ教材を活用した生徒の割合の推移

学期中		長期休業中	
令和4年2月～5月	20.0%	令和4年8月	67.5%
↓			
令和4年9月～12月	48.7%	令和4年12月	72.5%

2 今後の課題

- (1) 学習管理表の活用については、家庭での入力に難しい生徒も見られた。学校で入力する時間を確保することが求められるが、生徒全員に一律に時間を設け、記入させることとすると、自主性とはかけ離れてしまうため、両者のバランスを保つことが課題である。
- (2) アダプティブ教材を用いて家庭学習に気軽に取り組む環境が整備された。しかし、それでも家庭学習に取り組めない生徒に対しての指導方法を構築することが課題である。特に本校の生徒は、高校受験が学力向上へのモチベーションにつながりにくいため、必要に「迫られる」学習から「必要だから学びたい」学習への転換が必須である。

3 今後に向けて

本校では、これまでも学力向上に向けて放課後学習会を実施していた。しかし、自習形式での放課後学習は、生徒にとって困難であり、基礎学力の定着につながっていなかった。そこで、令和4年度

令和4年度に実施された特別講座の例

- 「読解力」とはなんだ？ ～読解力の本質～
- スポーツの大会を企画しよう ～場合の数で考える～
- 翻訳サイトとの上手な付き合い方
- 「ナンバ走り」から学ぶ 人体の構造と近世の社会
- しょう油から食塩をとり出そう！

から内容を改め、全校学習会「大望タイム」を実施することとした。「大望タイム」では、50分の学習時間を分割し、自習または各教科等の特別講座を生徒が選択することができるようにしている。多くの生徒が特別講座を受講し、学ぶ意義を考えるきっかけとなったが、自習を選択する生徒への支援は不十分であった。

そこで、今後は前述の学習管理表と全校学習会「大望タイム」との連携を図り、自習での生徒の頑張りを可視化し、個に応じた支援を行うことで、生徒の学びに向かう力の向上に向けた取組を推進していきたい。

青梅市教育委員会

1 青梅市の紹介

東京都の多摩西部地域に位置し、東京都の2市3町と、埼玉県との2市の合計7市町と隣接している。多摩川が市内のほぼ中央を西部から東へ貫流し、北部には入間川の支流である霞川と成木川が流れている。東部の平地から、丘陵地、山地へと変化し、最高点は鍋割山の1,084メートルである。管内には小学校が17校、中学校が11校あり、教職員数は約600人、児童数は約5,400人、生徒数は約3,000人である。

2 管内の学校の特徴

(1) 青梅市立第六中学校

東は埼玉県飯能市に接し、西は青梅坂を越え、森下町へ続く東西7キロメートル、南北5キロメートルの細長い学区で、



(避難所開設訓練の様子)

15地区に分かれている。学区の多くが市街化調整区域であるため、人口が年々減少し、生徒数も徐々に減少している。恵まれた自然環境の中で、教職員・生徒・保護者が一体となり「豊かな人間性を基調にたくましく生きる生徒」をめざして努力している。地域住民は学校教育への理解が深く、協力的である。

小学校との連携が活発であり、避難所開設訓練では、小・中学校が同日に災害を想定して避難所開設訓練を実施し、多くの地域の方々が参加した。訓練では学校休業日に土砂災害が発生したことを想定し、自治会役員と生徒だけで避難所を開設することを目標に、自ら主体的に活動することが定着している。

児童・生徒はこれまで50年間、自治会と青少年対策委員会が主催する「黒沢川清掃活動」に加わり、共通の目標をもって活動することで地域との絆を深めてきた。昨年度からは、「ホテルをふやしたい実行委員会」が立ち上がり、小・中・地域が連携してホテルの保存活動に取り組んでいる。

(2) 青梅市立第七中学校



(「青梅学」
地域人材の活用)

地域は成木川とその支流の北小曾木川の溪流沿いに位置し、海拔400メートルに近い高地にも住宅がある。学区域の多くが市街化調整区域に指定され、人口の流入はほとんどない。平成24年度からは、青梅市立小規模特別認定校として市内の他地域からの通学も受け入れている。周辺地域は自然に恵まれており、成木川流域ではホテルも生育している。地域住民は、学校に対して「おらが学校」という誇りをもっており、とても協力的である。

地域の教育力を学校教育へと積極的に導入するために、総合的な学習の時間において地域人材を活用したり、「成木地区小・中合同マラソン大会」や「ホテルの学習会」などを開催したりしている。

特に、「青梅学」に関して、地域人材を活用することで、生徒自らが地元の文化を継承しようとする郷土愛を育てている。青梅学は、市内の他地域から通う生徒にとっても、青梅を知るきっかけとなっており、全ての生徒が地域の良さを実感しながら学校生活を送っている。

檜原村教育委員会

1 檜原村教育委員会の紹介

西多摩郡檜原村は、多摩川最大の支流「秋川」の源流にあり、神奈川県や山梨県と接し、島しょ部を除き、東京都で唯一の村である。村の大部分が秩父多摩甲斐国立公園に指定されており、緑と清流に囲まれた自然豊かな山間地となっている。人口は、現在約2,100人、面積は、105.41平方キロメートルで村の周囲は急峻な山嶺に囲まれ、全体の9割以上が林野である。急峻な山々に囲まれた檜原村では、日本の滝百選に選ばれた「払沢の滝」、都指定の天然記念物「神戸岩」、地域の木育活動の推進地である「檜原森のおもちゃ美術館」、登録有形文化財「高橋家住宅」など、多くの魅力的な自然の風景が満喫できる。

村内には、小学校が1校、中学校が1校あり、平成23年に、小中一貫教育校檜原学園檜原小・中学校を開園した。檜原村教育委員会では、村全体で「檜原村の郷土に根ざし、ふるさとを大切にする」ことを目標に、「9年間の系統性・連続性を意識した指導」「確かな学力を身に付けるための学びのカルテの活用」「小中指導交流の充実」「ICT教育の充実」「外国語教育の充実・国際派遣事業」「郷土檜原村についての学習」を推進している。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 檜原学園檜原小学校

学区域は村全域と広く、バス通学者が9割以上を占めている。今年度の児童数は60人、教職員数は27人である。檜原学園の小学校として、小・中学校の9年間の学びの連続性を意識し、小学校段階から、個に応じた指導の充実を図っている。特に、郷土教育「ふるさと檜原学習」では、江戸時代以来の在来種である「おいねいも」を栽植し、自分が暮らす地域の理解を深めるとともに、持続可能な開発目標（SDGs）を意識した教育活動を展開している。檜原村の郷土に根ざし、ふるさと檜原を誇りに思い、大切にすることを育成できるように、地域・保護者との連携を深め、地域の人材及び素材を生かした教育が特色である。



(檜原学園檜原小学校)

(2) 檜原学園檜原中学校

村内全域を学区域とし、バス通学者が約9割、自転車通学者が約1割である。今年度の生徒数は27人、教職員数は22人であった。檜原学園の中学校では、ウィーンから音楽家を招き、国際音楽交流を行ったり、海外派遣事業へ積極的に参加したりするなど、国際理解教育を推進している。また、職場体験にも力を入れており、地域との交流や職業人講話を積極的に行うなど、一人一人の生徒を大切にし、寄り添った細やかな指導を行うことで、将来、自らの人生を自分で切り拓く力を育成するためのキャリア教育が特色である。



(檜原学園檜原中学校)

奥多摩町教育委員会

1 奥多摩町教育委員会の紹介

奥多摩町は東京都の北西端に位置し、東京都の約10分の1に当たる225.53平方キロメートルという広大な面積を有する。全域が秩父多摩甲斐国立公園に含まれ、東京の奥庭として親しまれている。その大部分は山岳が占め、町の中心を多摩川が西部から東流している。人口は約4,700人で、水道専用ダムとして東洋一の規模を誇る小河内貯水池（奥多摩湖）を有する、人と自然が調和した潤いのある町である。また、山村の文化伝承や生活様式が今でも大切にされ、郷土芸能の宝庫といわれている。



(国指定重要無形民俗文化財
ユネスコ無形文化遺産 小河内の鹿島踊)

奥多摩町教育委員会は、次代の町を担っていく人材の育成を課題に置き、知・徳・体の調和のとれた子供の育成を目指している。「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」を柱に、子供たちの「生きる力」を具現化するための施策を展開している。そのために、学校、家庭、地域が連携し、生涯を通じて学び支え合うことのできる地域社会の実現と「町の中と外から関心を持たれる教育のまちづくり」の推進を担っている。

2 管内の学校における教育の特色

管内には、小学校が2校（古里小学校・氷川小学校）、中学校が1校（奥多摩中学校）がある。児童数は約150人、生徒数は約60人である。小学校にはALTが常駐し、学校生活全般を通して外国語に触れる機会が十分に確保されている。

また、全校がコミュニティ・スクールに指定され、保護者・地域住民・教職員の連携を図り、地域と共に、地域に開かれた学校づくりを推進している。

奥多摩町の自然や文化等の教育資源を積極的に活用し、学習している。各学校で奥多摩町の自然や地域人材との積極的な関わりを通して、各種体験学習を充実させ、児童・生徒の興味・関心を高めるとともに、郷土を大切に思い、地域に貢献しようとする子供の育成を図っている。日常的な交流学習や教員間の情報交換から、小・小連携や小・中連携をより一層強め、奥多摩の子供の育成に向けて取り組んでいる。

このように、奥多摩町だからこそできる学びを重視し、子供たち一人一人が確かな学力を身に付けるために、町全体が一体となり教育活動を実践している。



(奥多摩町立古里小学校)



(奥多摩町立氷川小学校)



(奥多摩町立奥多摩中学校)

東京都教育庁大島出張所

1 大島出張所の紹介

大島出張所は、富士箱根伊豆国立公園に属し、伊豆諸島の北部に位置する大島・利島・新島・式根島・神津島の5島、1町3村（小学校7校・中学校7校）を所管している。

東京都及び管内町村教育委員会の教育目標及び各学校の教育目標の具現化を目指し、東京都教育庁指導部、東京都教職員研修センター、東京都教育相談センター等、関係諸機関との連携を図りながら、管内各校の教育環境や教育の実態を踏まえ、島しょの教育上の課題を的確に把握し、学校教育の充実に必要な指導事務事業を行っている。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 大島町

郷土大島への誇りを胸に、21世紀を主体的に生き抜く子供たちのための教育を第一とし、「学力向上」、「いじめ、体罰の防止・根絶」、「特別支援教育の充実」等の取組により、教育目標に示された人間の育成を目指している。平成27年度に大島町学力向上推進委員会が発足。学力調査や授業改善、生活習慣スタンダードの策定等、学校・家庭・地域が協力しながら、町全体で学力向上に向けて取り組んでいる。



(大島町立つばき小学校)

(2) 利島村

「自立」を学校教育目標の中核に据え、15歳で島を離れる子供たちにとって必要な社会的資質・能力の育成を目指した教育活動を展開している。小学校の授業に中学校教員が入りティーム・ティーチングで指導を行ったり、小中学校の教員が合同で校内研究を深めたりするなど小中学校併設のよさを最大限に生かした取組を進めている。

(3) 新島村

協同を意味する「モヤイの精神」をもって郷土を愛し、たくましく生きる子供たちを育むとともに、保・小・中・高の密接な連携を推進していくことを目指し、「新島村連携型一貫教育」に取り組み、児童・生徒の学力向上及び健全育成を図っている。

また、令和3年度からは、教育支援センターを開所し、不登校児童・生徒への対応の充実に図り、特別支援教育の充実に向けた取組が進められている。



(新島村立新島中学校)



(神津島村立神津小学校)

(4) 神津島村

神津島村授業基本モデルを基に、児童・生徒にめあてをもたせ、話し合いや振り返りを適切に位置付けることで、指導と評価の一体化を図った授業を小中共通で実践しており、小中それぞれの教員間で授業を見合い、研さんを重ねている。

本年5月には、四島体育大会(利島・新島・式根島・神津島)の会場となり、4島の中学生の交流が図られた。

東京都教育庁三宅出張所

1 三宅出張所の紹介

三宅出張所は、東京都心から南方約 180 キロメートルに位置し、伊豆諸島南部に位置する三宅島と御蔵島の 2 島、2 村を所管している。管内には、小学校 2 校・中学校 2 校があり、児童約 120 人、生徒約 50 人が在籍している。

東京都教育委員会及び管内各村教育委員会、各校の教育目標の実現に向けて、教育庁指導部及び教職員研修センター等と連携しながら、指導事務事業を展開している。「GIGA スクール構想」の確実な実施に向け、「情報教育（ICT）担当者会」等を通して、各校の教育 DX を推進していく。また、昨年度に引き続き、『未来の東京』戦略』に掲げる東京型教育モデルの実現に向けて、教育庁総務部教育政策課や島しょ地区と連携して、デジタル技術を活用した教育実践についての情報交換会を行う予定である。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 三宅村

平成 12 年の噴火による全島避難の影響もあり、現在、村内は小学校・中学校ともに 1 校ずつとなっている。

三宅村では、三宅村立三宅小学校・三宅村立三宅中学校に三宅村立みやげ保育園、東京都立三宅高等学校を加えた「保小中高一貫教育」を推進し、異校種間における教育課程の連携や円滑な接



(三宅小学校)



(三宅中学校)

続を図っている。学力向上、キャリア教育、健全育成の三部会で構成される定例委員会のほか、合同行事を開催している。また、教育研究活動の中核となる教員を育成し、村内の教育の向上を期するために、三宅村教育研究員を設置している。令和 4 年度は、「ユニバーサルデザインの視点でボトムアップをねらう算数科習熟度別指導」、「地域人材を生かした島しょ地区の食育～家庭・地域とつながり子供の未来を育む授業～」と主題を立て、研究を進めた。

(2) 御蔵島村

村内に御蔵島村立御蔵島小学校と御蔵島村立御蔵島中学校を設置している。島内に高等学校がなく、児童・生徒は、中学校卒業と同時に「15 歳の旅立ち」を迎えることになる。



(御蔵島小・中学校)

御蔵島小・中学校では、異学年や異校種との合同授業や交流活動等、小中併設校の特性を生かした 9 年間の一貫性と継続性をもった教育活動を組織的・計画的に行っている。また、動植物を始めとする御蔵島の自然環境をテーマとした学習を進め、御蔵島の特色を理解するとともに、島の未来について考える「御蔵みらいの日」を設定している。

さらに、毎月 5 の付く日には、昭和初期から続く「奉仕日」として、早朝から児童・生徒が、郷土の美化に貢献している。

東京都教育庁八丈出張所

1 八丈出張所の紹介

八丈島は東京都心から南方約 287 キロメートルの海上に位置し、面積 69.1 平方キロメートル、周囲 58.91 キロメートルのひょうたん形の島である。八丈町の人口は 6,857 人、世帯数は 4,124 である。青ヶ島は八丈島の南方約 70 キロメートルに位置し、面積 5.96 平方キロメートルの楕円形の島である。青ヶ島村の人口は 146 人、世帯数は 104 である（令和 5 年 4 月 1 日現在）。

管内には小学校 4 校（八丈島 3 校、青ヶ島 1 校）、中学校 4 校があり（八丈島 3 校、青ヶ島 1 校）、教職員数は 120 人、児童数は 333 人、生徒数は 146 人である（令和 5 年 5 月 1 日現在）。

八丈出張所では、学校及び教職員の抱える様々な課題に対応するために、管内の小・中学校において東京都教職員研修センターによる都教委訪問や島しょ地域研修支援事業を活用し、喫緊の教育課題や各校の要望に応じた研修機会の充実を図っている。

本年度は昨年度に引き続き、島しょ地区小・中学校におけるデジタル利活用の一層の推進に取り組むため、八丈町、青ヶ島村教育委員会と連携し、町村教育委員会の主体性を支え、支援を行っている。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 八丈町立学校における特色

児童・生徒一人一人の理解度に合わせ、きめ細かな指導を行っている。住民の連帯感が強く、学校教育に対して協力的で、学校行事への地域住民参加も積極的である。

八丈町の学校は多くが小規模校である。八丈富士と三原山の間には、島の経済活動の中心地があり、当該地区には島全体の児童・生徒の 8 割以上が居住している。

また、八丈町は、都が推進する「島しょ小・中学校におけるデジタル技術を活用した教育推進事業」においても、大きな役割を担っている。

(2) 青ヶ島村立学校における特色

青ヶ島小学校は明治 7 年 1 月 15 日に、青ヶ島中学校は昭和 22 年 4 月 1 日に創立された。

村の人々にとって、古くから学校は特別な存在であり、その意識は現在も続いている。そのため、学校教育に対して協力的であり、地域で子供を育てるという風潮がある。

総合的な学習の時間において、小学校では、島の特産である、かんも（さつまいも）を育て、収穫する活動、中学校では、これからの青ヶ島の課題（島の人口減少問題対策など）について考える活動などに取り組んでいる。



（左：八丈小島 右：八丈富士）

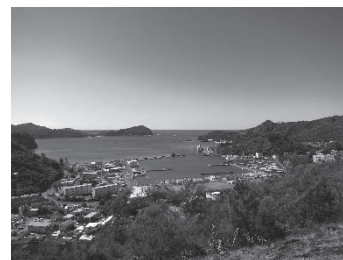


（青ヶ島全景）

小笠原村教育委員会

1 小笠原村の紹介

小笠原諸島は、都心から南に約1,000～1,800kmの太平洋上に散在する30余の島々で、一度も大陸と陸続きにならなかったことのない海洋島である。聳島（むこじま）列島、父島列島、母島列島、火山列島（硫黄列島）で構成され、全域が東京都小笠原村に属している。人々が暮らしているのは父島（約2,100人）と母島（約450人）である。硫黄島や南鳥島には自衛隊員や気象観測員等が常駐している。



（父島二見港）

現在、父島では小笠原小学校及び小笠原中学校校舎の建替え事業を進めている。本事業完了後には、村内全小・中学校が施設一体型の校舎となる。カリキュラム・マネジメントの視点に立った義務教育9年間の体系的な学びの実現を目指し、小中一貫教育の一層の充実を教育施策の中心に据えて取り組んでいる。

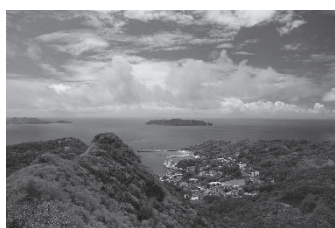
2 管内の学校における教育の特色

(1) 小中一貫教育の推進

既存の担当者会等を再編し、今年度より「小笠原村立学校小中一貫教育推進協議会」を新設した。下部組織として三委員会（小中一貫教育研究推進委員会、デジタル教育推進委員会、義務教育学校準備委員会）を設置し、村立学校に所属する全ての教職員による小中一貫教育推進体制を確立した。

加えて、今年度から母島小中学校を「小笠原村立学校小中一貫教育研究推進指定校」に指定した（令和6年度までの2年間）。「義務教育9年間における体系的な情報活用能力の育成」と「小笠原学習」の実践的活用を目指した「観光大使プロジェクト」の2本柱による研究を開始する。

(2) 「小笠原学習」の取組



（母島沖港）

令和4年度から、これまで村立学校各校で実施していた「小笠原学習」に関連する各種学習活動の体系化に取り組んでいる。

昨年度は、総合的な学習の時間において小学校第3学年から学年ごとのテーマを設け、中学校卒業時まで育てたい児童・生徒の姿を資質・能力の視点で具体化した。小笠原小学校、小笠原中学校では、抽出学年の年間指導計画を作成し、母島小中

学校においては、研究指定校の取組として単元配列表を先行的に作成した。令和6年度末までに村立学校各校の全ての学年で各教科等の年間指導計画に基づいた単元配列表が完成する予定である。

また、令和5年度からは、全ての村立学校で教育課程に明確に位置付けた「小笠原学習」が開始される。RPDCAサイクルの中で活動内容や指導計画等の改善・充実を図りながら、未来の小笠原村を担う人材に求められる資質・能力の育成に取り組んでいく。

令和5年度 へき地・小規模校教育研究発表会
第26回研究発表会資料

東京都教育委員会
東京都へき地教育研究協議会
〔東京都教育委員会印刷物登録
令和5年度第29号〕

令和5年7月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 03-5320-6869
印刷会社 株式会社モモデザイン

